

抜粋版

振興会ニュース

第11号

1999年9月

日本バスケットボール振興会

目 次

○ 平成11年度 春季役員会の概要	1
○ 尾崎日本バスケットボール協会新会長・住田会長を表敬訪問	5
○ 三ッ本常彦名誉顧問を偲ぶ	6
牧山 圭秀 黒川 義雄 畑 龍雄	
鈴木 正三 富士 秀雄 吉田ミツ子	
○ J B Lの新構想 =スーパーリーグの発足=	吉田 正彦 12
○ W J B Lの新構想 =第1回Wリーグ開幕にあたって=	高木 彰 14
○ ハワイA J Aオールスターチームの歓迎パーティ	中川 幸男 16
○ 今あらためて顧みる=半世紀前の国際試合の意味=	大塚 周一 18

・ハワイA J Aオールスターを迎えて	全日本監督	牧山 圭秀
・ハワイチームに学ぶ	全学生コーチ	畑 龍雄
・日本チームと対戦して	ハワイA J Aオールスターチーム・コーチ	
	フランシスコ福美・相坂	

○ 会員だより	25
浅野 義尋 山本 岑生 三浦 正純 高田 洋子 海老原矩子	
○ 各団体ニュース	30
★実 連 ★学 連	
○ バスケット関係今後の主な行事日程	35
★総括スケジュール ★J B L・日本リーグ ★W J B L・Wリーグ	
○ 振興会の各懇談会活動状況	45
★普及懇談会 ★編集・広報懇談会 ★OB懇談会	
○ 事務局だより	48



JBLの新構想 —— スーパーリーグの発足 ——

JBL専務理事 吉田 正彦

この度JBLでは、日本バスケットボールが更に発展し、普及することを目標に中期計画を策定しました。

その中期計画の一環にスーパーリーグ構想があります。このスーパーリーグ構想を実現することにより、日本リーグはもとより、日本のバスケットボール全体が盛況になることを基本理念としています。

スーパーリーグ構想は、2001年10月から、「8チーム編成によるスーパーリーグを発足させ、ホームタウン方式を導入すること」により、「バスケットボールの人気を広く集めること」をねらいとしています。

スーパーリーグに参加するチームを8チームにすることにより、高度で面白いゲームを展開して行きます。ゲームの質が高く内容も充実して面白ければ、人気は上昇し観客も増えると確信しています。

更に観客が増加する相乗効果により、マスコミの取り上げ方も変わり、テレビ放映の機会が多くなります。

昨今のような経済状況下では、各企業とも企業スポーツに対する経費を削減する方策を考えていると思われます。厳しい経済状況であってもアメリカのNBAのように絶大な人気を集めれば、企業の方でも前向きに取り組んでくれるはずです。

バスケットボールが高い人気を集めるため、スーパーリーグ構想では以下のような戦術を策定しております。この戦術は更に環境整備を進め、2000年10月までに具体的な整備を完了する予定にしています。

人気上昇のための戦術について、現在まで検討してきた内容をご紹介します。

スーパーリーグに参加するチームは、すべて自チームのホームタウンをもちます。ゲームは、まず各チームのホームタウンで、ホーム・アンド・アウェイの方式によりシーズンの前半1ヶ月間と後半の1ヶ月間に行われます。

各チーム共、平常からホームタウンで地元に着した活動を展開することにより固定的なファンを多く集めるよう努力します。地元に着した活動としては、従来あまりなかった地域行政組織との連携、バスケットボールを社会福祉に役立てて頂くこと、教育現場との結びつき、社会体育への貢献など、盛り沢山の行動を起こしていきます。ホームタウンではチームを持つ企業の商業活動も行えるよう環境を整えていきます。

次に全国スーパーリーグ開催の重要拠点を設定します。この重要拠点としてはホームタウン以上に観客動員が可能な地方を予定しています。現在までのところ、北海道、仙台、新潟、静岡などが候補地としてあがっています。

重要拠点開催では、開催地がゲームの組み合わせカードを選択できるよう調整しますの

で、各拠点毎に人気チームを登場させることが可能になります。

東京での開催としては、毎週金曜日の夜、フライデーナイトと称して代々木で定期的にゲームを行います。このゲームをできるだけ多くテレビ放映するようにし、居ながらにして面白いゲームが、お茶の間に楽しめる展開にします。

テレビ放映は、スーパーリーグを世間に宣伝できる大変重要な手段と認識しており、BS放送を始め、一般放送でもとりあげて頂くべく努力中です。

以上のような企画により、総当たりリーグ戦を10月から翌年2月まで開催し、その後プレイオフを行います。プレイオフは3月になる予定ですが、シーズン当初の10月からほぼ1ヶ月毎に区切ってスポンサーをさがし、各クール毎にスポンサー付きのシリーズ化を目指します。

ゲーム数については、ホームタウン、重要拠点における開催日程にも左右されますが、“中味の濃いゲームをより多く開催すること”をモットーとして決定します。

次に財政的問題があります。バスケットボール界では、どこの団体も財政的に大変な状況にある中、JBLが率先して財政強化に努めなければなりません。

スーパーリーグを成功させることにより、当面7億円程度の売上を計上することを目標に据えます。具体的には、大人の入場者を増やし、入場料単価を引き上げる、有料入場者を増加させる、利便性がよい会場を確保する、などがあげられます。

一方、支出の面でも各チームの合理化に協力して行きます。てはじめに外人選手の問題に取り組み、チーム経費の相当部分をしめる外人選手のサラリーを適正な内容に改めます。現在JBLの全チームが、外人選手に要している費用は、全部でおよそ25億円にのびます。これは外国のエージェントによって、外人選手のサラリーが年々つりあげられてきた結果です。

スーパーリーグ構想では、外人選手の人数枠や、サラリーについてメスを入れ、少なくとも外人選手に要する全体の経費を従来の半分程度に削減していきます。

特にエージェントに対して、JBLが一括交渉、一括契約をするなどすれば、可能な話です。そのためには、日本の外人選手の殆どをしめるアメリカ選手事情を研究する必要がありますが、これについても既に取り組みを始めております。

スーパーリーグ構想と並行して、スーパーリーグに参加できないチームのゲームについても検討を行っています。現在のチーム数から言えば10チームになりますが、この10チームによる日本リーグも同様に開催して行きます。

スーパーリーグによる財政で、日本リーグの方も賄っていくことになります。

スーパーリーグを成功させ、世間の注目を集められるようになれば、日本のバスケット界全体の発展に必ず寄与できると考えております。

現在は、構想をひとつひとつ実現に向け実行に移しているところです。多くの諸先輩の方々のご支援を是非ともお願いいたします。



W J B L の新構想

—— 第1回Wリーグ開幕にあたって ——

W J B L 常務理事 高木 彰

1967年、バスケットボール界の活性化を狙いとして「第1回バスケットボール日本リーグ」が開催された。これは、サッカー、バレーボール等続く日本リーグであり、「普及」と「強化」を目的とし、財団法人日本バスケットボール協会と日本実業団連盟の主催によって、当時日本実業団連盟に加盟していた日本のトップチーム（男女各8チーム）が参加することとなった。現在と比べゲーム数は少なかったが、当時は今ほど交通期間が発達していなかったため、全国各地への転戦は大変な苦勞であった。しかしながら、過去数々の名勝負、名選手を生み出し、国際大会での日本のレベルアップにも大きく貢献し、各地でちびっこファン、バスケットボールファンの目をくぎ付けにしたことは大きな財産となっている。

第1回開催から32年もの歴史が流れ、その間「日本リーグ」としての開催が日本実業団連盟の主催から財団法人日本バスケットボール協会へ移管され、更に1995年財団法人日本バスケットボール協会とバスケットボール日本リーグ機構（J B L）が行うこととなった。

そして1998年、女子の日本リーグがJ B Lより分離独立し、新たにバスケットボール女子日本リーグ機構（W J B L）として今年から女子バスケットボールのリーグを独自に運営することになった。

W J B Lの設立趣旨は、女子リーグの「強化と普及」を各チームの母体企業が積極的に支えて行こうというもの。特に女子バスケットボールは世界の舞台で通用するレベルまで成長し、常に目指していくのは「世界」。そしてその舞台で戦い続けていくためには、国内においてより質の高い試合を増やし、リーグ戦を活性化させ、広く「普及」させることである。

昨今女性の社会進出が目覚しいが、スポーツ界も同様女性アスリートの世界における活躍が目立っている。W J B Lはそういった中で世界で通用する選手の育成、チームの強化を考えていくことが大きな課題となっている。

バスケットボール女子日本リーグは1988年から昨年までの10年間1部12チーム、2部6チームというリーグ構成で運営され、バスケットボールファンの方々には定着した感があった。その間外国人選手の登録や、1部リーグを6チームずつ並列に分割し、決勝トーナメント（プレーオフ）方式を導入するなど、リーグの活性化を狙ってさまざまな運営を行ってきた。そして今年からWリーグ（旧1部）8チーム、WIリーグ（旧2部）8チームというリーグ構成により第1回Wリーグとして新しいスタートを切ることになった。

しかし、この決定に至るまでは様々な難しいハードルを一つ一つ超えてきている。特にチームのポジションが変わってしまう可能性を持った中で、チーム企業の運営に携わるフロントの方々、またチームの指揮をとる監督・コーチの方々等、血のにじむような苦渋の決断を迫られた局面もあった。何回もの会議が開かれ、かなりの議論が繰り返された。そ

して女子バスケットボールの更なる発展と活性化のため、12チームあった1部の構成を上位リーグ8チーム（Wリーグ）、下位リーグ10チーム（W I リーグ）の結論にたどり着いたのであった。

一方その間バブル景気が弾け、「不況」の嵐が経済界を襲い、バスケットボール界のみならず、各スポーツ界にもこの影響が吹き荒れている中、W J B Lとしては国内での充実はもとより、時代の先取りをし、国際化も視野に入れ一層の発展を目指そうということになった。

そして1998年になって実際に休部になるチームが相次ぎ、長い間18チームで支えてきたリーグ構成が崩れ、日本実業団連盟から推薦された日本航空、広島銀行の2チームを加え、全16チームの枠組みで運営されることになった。

今年から始まる【Wリーグ、W I リーグ】は、女子バスケットボールの存在を広く世の中にアピールし、沢山のファンの方々に見て頂き、また、やっても面白いスポーツとして普及させて行くことが大きな使命となっている。

そして多くの人の「見る目」が選手たちの息の抜けないプレーを引き出し、そしてそのことによりまた選手たちを鍛えていただけると信じる。

我々の願いは「バスケットボールのメジャー化」と「Wリーグが世界に通用する女子バスケットボールになること」である。

どうか今年から始まる【Wリーグ・W I リーグ】に今まで以上の熱いご声援を頂き、女子バスケットボールが世界に再び飛び立っていけるよう後押しをお願いしたい。「アテネオリンピック」に向かって…。

Wリーグのチーム構成

〈Wリーグ〉※8チーム

シャンソン化粧品	シャンソンVマジック
ジャパンエナジー	J O M Oサンフラワーズ
トヨタ自動車	アンテロープ
デンソー	アイリス
三菱電機	コアラーズ
日立戸塚	レパード
三洋電機	サンシャインズ
三井生命	ファルコンズ

〈W I リーグ〉※8チーム

富士通	レッドウェーブ
第一勧銀	D K Bハーティーズ
日立甲府	クィーンビーズ
日立那珂	スクアレルズ
東京三菱銀行	ゴールデンイーグルス
富士銀行	ダイナミクス
日本航空	ジャルラビッツ
広島銀行	ブルーフレームズ

ハワイ A J A オールスターチームの歓迎パーティー —50年ぶりの来日—

5月27日、都内目黒の雅叙園で、ハワイ A J A（ハワイ日米協会の略）オールスターメンバー（一部）の来日歓迎パーティーが盛況裡に開催された。

ハワイ A J A オールスターはハワイ在住の日系2世で構成されたチームで、昭和25年3月に来日、戦後はじめての国際親善ゲームを東京、西宮、京都、名古屋で挙行、全日本（関東・関西）、全日本学生、全京都、全愛知、日本鋼管と対戦、8戦全勝で帰国した。この国際交歓は、戦争中敵性スポーツとして禁止され戦後も長く閉鎖状態にあったわが国バスケットボール界にとって、近代技術革新の新風を吹き込まれ開眼した画期的な競技会であった。半世紀を経過した機会に旧交を温めるため、その一部の方々が婦人同伴で来日されたのだが、会場に雅叙園を選んだのは、当時のハワイチームの宿舎であった縁による。

歓迎パーティーは4階飛鳥の間に、縁故者・関係者約50名が参集し、午後5時から発起人会代表牧山圭秀氏の挨拶で始まった。牧山代表は挨拶のなかで、「シュートというものは両手でしっかりとボールを保持して行うものと教えられ励行してきたのだが、ハワイの正確なワンハンドシュートをみて認識を一変させられた。ハワイのプレイが日本のバスケットボールの発展に貢献した影響は大きい。」と称賛。記念品の贈呈（日本協会・加島副会長、振興会・牧山名誉会長、発起人会・牧山代表）が行われ、ハワイ側を代表してマイク須貝氏から謝辞が述べられた。次いで当時の全日本監督・牧山氏、全学生監督・畑氏、全愛知監督・森沢氏にハワイ側からレイが贈られ、再会を懐かしみつつ強い握手を交わした。レイは参会者全員にも配られ鮮やかな色彩が会場に溢れた。



乾杯は森沢誠一氏の音頭で行われたが、挨拶では当時のハワイチームのマナーの良さが語られた。続いて会食・懇談に入り、各氏入れ代わって思い出ばなしを披露。最初に演壇に立った畑 龍雄氏はハワイチームのもたらした新技術の影響、河原武雄氏（元NHKアナウンサー）はハワイチームの華麗な球さばきとバスケットボール放送の苦心談等、楽屋の裏話。井上一男氏は戦後GHQの依頼を受けて文部省に赴任したエピソード。どの話も戦後のバスケットボール復興に青春を賭けた貴重な懐旧談で、場内を感銘させた。ただ、しばしばバスケットボールの特殊な専門用語が飛び出すので通訳の島田麻衣子さん、山下みどりさん（ともに上智大学女子バスケットボール部員）は汗だくだった。

次に、ハワイの人達に日本の情緒を味わって頂こうと企画された三味線演奏（唄入り）が行われた。出演は杵屋鶴佳さんと和服姿も美しい同社中の5人の女性。演目は越後獅子、黒田節、佐渡おけさ等。藤堂匡令氏（元日本協会審判部長）がハンドオルガンで飛び入り伴奏を買って出た。演奏中に紋付き袴に衣替えした牧山発起人代表が登壇し、三味線片手に玄人はだしの小唄を披露、満場の喝采を浴びる。マイク須貝氏も「ワンダフル」を連発。瞬く間に予定の2時間を経過し、名残尽きないまま午後7時閉会した。散会にあたっては、ハワイ側から全員に名産のチョコレートが一箱ずつ配られた。また薄井千代さん（振興会理事）からハワイ側のご夫人達にお手玉のバック（5個入り）が贈られた。

ハワイの一行は、こののち鹿島、房総、越前、金沢、飛騨高山、箱根、鎌倉等各地を周遊して故国の新緑風景を満喫し、6月5日無事帰国した。

なお、パーティ経費は参会者の会費のみでは不足であったが、黒川義雄氏（振興会副会長―当日は病気のため欠席）からの10万円の寄付と発起人からの拠出で賄われた。

当日の参会者は下掲の通り。写真は内田辰雄氏（前日本協会理事、振興会顧問）の提供による。（当日司会担当 中川幸男 振興会常務理事・元日本協会事務主任 記す）

当会関係者

○監督・コーチ	牧山 圭秀(全日本)	畑 龍雄(全学生)	森沢 誠一(全愛知)
○選手	池田 博 大塚 周一	井上 一男 松村篤之介	関口 莊次 長島 久
○役員	三ッ本常彦(故) 三宅 一郎	今泉 正一	丸山 正敬
○当日参加者	藤堂 匡令 川本禮治郎 笹岡 太一 中野 富郎 加藤 雅春 三木 均	薄井 千代 内田 辰雄 稲垣 安二 関 悦受 山田 洋子 晨 匡一郎	加島 義一 手嶋 昇 藤本 盛策 佐伯 正博 今泉 健一 中川 幸男

—— 今あらためて顧みる ——

半世紀前の国際試合の意味

副会長 大塚 周一

1950年（昭和25年）3月、「国際親善・日米バスケットボール試合」と銘打ち、米軍総司令部の正式許可を得て、日本バスケットボール協会と毎日新聞社が共催挙行した「ハワイ A J A（日系市民体育協会）オールスターチーム」との試合は、戦後の日本本土におけるアマチュア・スポーツ界最初の国際試合として、浜松町の東京スポーツセンターに数千の大観衆を集めて開幕され、その後、西宮、京都、名古屋、東京と計8回にわたり行なわれた。

さて、第2次世界大戦後における日本バスケットボール界の復興は、当時の先輩諸氏のご尽力により、意外に早くその緒につくことができ、昭和20年12月に協会も再スタートを切り、22年1月には戦後初の全日本総合選手権が開催されている。然し、正式にF I B Aに加盟し、戦後の国際社会に復帰できたのは昭和27年のことであった。戦時中の活動停止によるブランクは大きく、戦後も暫くは米国進駐軍との若干の交流のなか、アメリカのバスケットボール技術を垣間見る程度で、昭和24,5年頃の日本バスケット界は、技術的レベルは一応昭和14年前後の最強レベルに匹敵する程度になっていたようではあるが、何か新しい技術の流れを求めて、その契機の到来を渴望していた時期であったといえよう。概ねそういった状況のもとにハワイチームの来日が実現したわけである。

処で、アマ・スポーツとしては戦後初の国際試合であったこと、しかも東西主要都市で開催できたこともあって、ハワイチームのもたらした果実は、多岐にわたって予想以上に大きかった。特に、バスケットの技術面でのそれは筆舌に尽くしがたいものがあり、今日国内プレイヤーの子供から大人までが、ごく自然に行なっている、片手シュート、パス、ドリブル等諸動作にしても、それらの大方の源泉はこのハワイ戦に在るといって過言ではない。

この大会に、私自身幸いにして全学生チームの一員として参加させて頂いたのだが、正確な片手のシュートやパス、多彩なドリブルワークによるボールキープ力、ロングパスを多用しての流れるような速攻等々、独特なリズムの中に見せるスピーディで華麗なテクニックの数々に、呆然と見惚れることが多かった。まだ学生であったので、深くは解らなかったのだろうが、体格、体力の面では大差ないながら、すべての面で要するに“育ち（環境）”と“基本技術”が違うのだということを痛感させられた鮮明な記憶がある。然し、私の手許に残っている当時の新聞等から、あの時期指導的立場におられた方々が発表されている感想、発言、論説の内容等は、流石に深い経験と洞察力のもと、洵に今なお興味と関心を抱かせてくれる、当を得たものとなっており、そうした真摯な取り組み姿勢や考え方が、あの時ハワイが見せてくれた具体的なお手本とともに、その後半世紀にわたる日本のバスケットの技術革新と進歩向上の流れに、脈々と生きてきたように思われる。

早くも50年の歳月を経て、今日では還暦前後の方々でもあまりご存知でない遠い過去のイベントとなっているかも知れないが、とにかく日本のバスケットボール界にとっては忘れられない、いや、忘れてはいけない歴史的一コマとして特筆すべき国際試合であった。そして、その価値ある技術の数々を我々に直接見せてくれたハワイチームのメンバーの一部の方々が、たまたま5月末に訪日されるという報に接し、前掲記事のような歓迎パーティが催されたのである。当時の彼我の関係者数十名が半世紀ぶりに一堂に会するというパーティなど、一寸例を見ないのではなかろうか。スポーツによる絆の素晴らしさを十分感じさせる、心温まる、感動的な集いであったが、同時にまた私は、この機会に、戦後日本のバスケットの原点（ハワイA J A）に立ち戻って、来し方行く末を考えてみることに意味があるのではなかろうかと思った。

技術的な面で、当時、この大会を通じ、日米双方の指導者、関係者、あるいはジャーナリズムが、お互いに何を感じ、何を語り合い、何を考えたか、をあらためて辿りながら、そういった洞察、分析、判断、示唆等が、日本国内でその後半世紀の間に、どのように消化され、活かされて今日に至っているかについて、それぞれの立場でフィードバックを試みるとともに、更に今後の進路に眼を向けてみては如何であろうか。

戦後における日本のバスケットの技術面は、このハワイ戦を契機として、主にアメリカのバスケットの洗礼を受けながら成長してきたといえようが、ご承知のようにレベル的に今なお世界に通用し難い。今日までの流れにのみ固執したり納得したりしてよい筈はなく、既にその流れの中での問題点、疑問点も浮上してきているのではなかろうか。より汎い視野と長期展望に立って、これからの日本の技術を更に活性化させる方向を模索すべき時期を迎えているように思う。

時恰も本年日本で開催されたA B Cにおいては、男女とも韓国に敗れシドニーへの道を断たれるという、まことに衝撃的な事態を招くに至っている。早くも新聞に“協会のリーダーシップ”を期待する旨の記事も見受けられるが、一日も速やかな再出発の決意、今後の方針等の表明が待たれるところである。

このような意味合いから、当時発表された記事の一部を、先輩方のご了承を得て、失礼ながら勝手に抜粋整理させて頂き、以下に掲げておきたいと思う。それぞれ、あくまでも50年前の記述ですので念のため。

以 上

ハワイ A J A オールスターを迎えて

全日本監督 牧山 圭秀

※本稿は、J A B B A 機関誌「バスケットボール」1950年（昭和25年）5月号に牧山氏が発表された論説の一部を抜粋整理させて頂いたものです。

- 来征ハワイ A J A チームは8戦全勝した。誰の目にもハワイの矢のようなロングパスや正確なシングルハンド・ショット、ボールが身体の一部としか見えない安全なドリブル、等には感心させられたことであろう。正直に申し上げて、ハワイチームがあれだけの技術を示してくれたことで私達は大満足であった。現在の日本における技術は、やや自己流に走っていた嫌いがあり、2～3年前から見せて貰ってきた米軍のプレーを参考に、方向転換を検討していた矢先、ハワイがかなり多岐にわたって良いお手本を披露してくれたわけである。この大きなハワイのお土産により、日本のバスケットボールの技術の進歩は、少なくとも1ヶ年得をしたといえよう。
- アメリカの技術は想像以上に大きく飛躍しており、特にワンハンドショットや速攻等の面にそれが感じられていたが、更に突っ込んでいえば、パスの巧さと身のこなしの軟らかさであった。ハワイはアメリカ本土から遠く離れてはいるが、必ずや本場の技術を身につけているであろうし、深みのある巧みさをもっているものと考えられた。果たせるかな、彼らは我々が数年後こうなればと願っていた、いわば年来の夢を目の前に見せてくれたのである。さて全日本軍とはいえば、速攻と遅攻とを半々程度に使うと共に、G、F、Cの差別なく、誰でもが全てのポジションに立ってプレイできる戦法、具体的には、主として傘型展開下でのスクリーンプレイによる攻撃を採用した。また、ハワイの速攻への対応についても種々議論があったが、結局は特別な方法に拠ることなく、早期帰陣を旨とした。

1回戦の山は後半5分にあった。前半はやっと同点に漕ぎ着けた状態だったが、なお余力ありと見て後半積極的に投げさせたことが、却ってハワイに速攻の好機を与え、完敗した。選手達の感想の中で重要な点は、防御への集中のあまり非常に疲れ、攻撃に弾みがつかず、不安感に駆られていたということである。これもハワイの無駄の無い、隙の無いボールのキープ力とシュート力、正確な速攻力に因るものと思われ、敵ながら天晴れといえる。速攻時には、多少の危険を犯しても速く攻めるべしと、速攻を拙速に結びつけている日本のチームは深く反省の要がある。

- 全日本としては、練習期間の面からも、選手達に馴染み深い8の字戦法でも採用して、もっと走らせてみた方が良かったかもしれない。国際試合ということで、選手も多少うわずったにせよ、実力一杯良く戦ってくれたと思う。ただ、技術探究の面からいえば、もう1、2回戦わせて貰いたかった。

- 最後に、ハワイチームについての感想と今後のことに触れておきたい。これから恐らく片手シュートと速攻が全国的に流行することと思うが、私は思い切ってやった方が良いと考える。ただし次の点に留意されたい。

- ・「片手は両手より難しいこと。」

従来両手でも上手くできなかった人が、1～2回見たハワイの真似をしてもそう簡単にできるものではないということである。片手の良いところは、モーションが速く、球の出る場所が防御側から遠く、位置も高いことである。また、片手シュートは、右手の場合、左手を添えていても、右の片手でボールを支えたときからシュートモーションに入るから、その片手で支えた時に身体のバランスがよくとれていることが非常に大切で、更にこの時、防御者が接近してきてシュートが無理となったなら止められなければならない。つまり、身体のバランスと、シュートする方の手でボールをしっかりキープできること、この二つが第一条件となる。

- ・速攻は、ある程度ロングパスが主流となるであろうが、短いパスの速攻時でもよくカットされていたのが、ロングパスともなれば危険性は増大する。当然味方へのパスが安全か危険かの状況判断と、正確なパスができる技術の習得が必要なので大変である。また、肩の上でボールを支えた時がロングパスのスタートであり、持ち上げた時点で無理だと思ったら止められる形でなければならない。つまり、コート内の全ての状況を一瞬のうちに見てとれること、速さに重点をおくよりもコート内の状況判断の訓練が大切であることを念頭において練習する必要がある。

以 上

ハワイチームに学ぶ

全学生コーチ 畑 龍雄

※本稿は、1950年（昭和25年）4月1日付スポーツ毎日新聞に畑氏が寄稿された記事の一部を、抜粋整理させて頂いたものです。

- 日本のバスケットボールにとっては、“世界の最強チームを迎えたよりもこのハワイチームを迎えた方がよかった”とさえ言いたい気持ちであり、大きな喜びとともに今後への責任を感じつつ、彼らを送るものである。
- 彼らの示した技術は、彼らが我々と全く同型の身体であっただけに、そのまま我々にも可能な筈だと思いながら見る事ができたし、それらを吸収できればそっくり自分達の血肉となり得るものであった。
- 彼らの戦法を一口で言えば、“速攻、激しく変化の多い動き、素早い中距離ショット”と

いえようが、それは、常にアメリカチームと対戦して身長差に悩まされている二世チームが辿りついた処として、将来国際ゲームを目指す日本チームは大いに参考にしなければならないであろう。

- ハワイのプレイヤーが口を揃えて言ったのは、“日本のプレイヤーにはファンダメンタルが欠けている”ということだった。日本で通常基礎技術として受け取られ練習されているものは、単なる筋肉運動の能力である場合が多いが、彼らが言う言葉の意味には、筋肉運動の能力を相手の状況に応じて適時に駆使できる能力までが含まれている。つまり、必要な運動能力と、それを使いこなすための判断能力とのあわさったものが、彼らのいう“ファンダメンタル”なのである。ただ、内容的には色々な段階がある筈なので、視野を広く持ちたい。
- 我々が最も感銘を受けたのは、あの当銘（弟）が見せてくれた、彼らのドリブル技術である。
あのようなドリブルは一体どうしたらできるのであろうか。我々は彼らのプレイを網膜にしっかりとらえて、あの“人球一体”のドリブルを何とか日本のバスケットボールに植えつけていかなければと思う。とにかく、ボールを見ないで激しいドリブルをすることが、本当にできるのだという確信を与えて貰ったことは、大きな據り処となろう。
- 何といっても速攻に使われた、オーバーハンドのロングパスは見事であった。ただ、あのパスを真似しようとして、やたらに力を入れて長くとばそうとしても駄目で、正しいフォームで近距離から順にものにしていかなければならないが、近中距離用にも便利に使えるパスなので、今後大いに練習する必要があると思う。
- ハワイチームの攻撃の狙いの一つは、“素早い正確な中距離ショット”で、これはチームの優れた威力となっていたが、どの選手も、これなら必ず入るという“自分の構え”を持っていて、その構えでシュートすることが常に忠実におこなわれている処に正確さの源がある。身体を崩したり、ループを変えたりして、無理なシュートを試みる日本の選手達は反省の要があろう。
- 日本の速攻は、どうも“はや攻め”ではなくて、“いそぎ攻め”の傾向が多分にあって失敗しているが、ハワイの速攻は、バックコートでボールを持った人は決して急がずに、フロントコートを走る味方に対し“ボールの速さ”で追いつこうとし、また、変化自在なドリブルをも活用し、最後はかなりゆっくり決定的な機会をつくるよう努めている。
- 本当の“プレイの激しさ”というものは、例えば、一寸した隙を相手がついてきた場合、それに十分応じていると、またその逆を思い切ってついてくるといった調子の急所急所に必ず襲いかかってくる変化の多いプレイの中にある。あの中距離ショットを主要武器としながら示すハワイの激しいプレイは、日本の選手達を全く疲れさせてしまった。
- ハワイチームのディフェンスから、我々はニヤレストマン・ディフェンスと徹底的なスィッチプレイの見本を見せて貰えた。マン トゥ マン・ディフェンスには今後シフトが絶対必要なことは明らかで、その点色々考える材料を与えられたことは有り難かった。

- ハワイチームのディフェンスにファウル・プレイが多かったことは確かで、これは感心しなかったが、考えようによってはファウルまでが技術化されていて、レフェリーとしては甚だとりあげにくい方法で、ファウルを行なっているとも言える。審判としての立場からは、あらためて審判の難しさを感じさせられた。

以 上

「日本チームと対戦して」

ハワイ A J A オールスターチーム・コーチ
フランシスコ・福美・相坂
(当時31歳)

※1950年（昭和25年）3月23日付の毎日新聞に、掲題記事が掲げられました。

以下は、その要点を抜粋整理したものです。

- 全日本（東京）チームが最強と思われた。身長に恵まれていたので苦労させられた。
- 日本鋼管の速攻の威力には一時たじろがざるを得なかった。
- 8試合を通じ最も強く感じたことは、日本のチームは速攻が下手だということである。
- ハワイチームは、“小型選手を多く抱えるチームはスピーディな試合をしなければ絶対に勝てない”ことを経験で知っている。そのために何から何まで“速く”ということが特色になっていると思う。その“速さ”というのは、足の速さだけではなく、すべての速さ、例えばボールを貰ってからシュートまでの時間の速さ、そのための片手シュート。将来国際試合に出場し、アメリカのような身長のあるチームと対戦する日本のバスケットボールとしては、当然“スピードのチーム”となる必要があることを痛感した。スピード欠如の理由の一つとして、日本チームのパスが殆ど両手で、モーションが大きいという欠点が挙げられ、ハワイの速攻の重要な武器となっている片手のロングパスが日本チームには見られないと言える。
- これらのことは、すべてバスケットボールの“基礎技術”に属することで、やはり日本チームは“基礎技術ができていない”ということになる。他に、例えば、アタック（プレス）ディフェンスに際して、コート全体を見渡せるという原則ができておらず、特に、ドリブルの時にそれは明らかである。ドリブルの上手さは、勿論ボールハンドリングの良さも必要だが、常にボールを見ず、相手の態勢とコート全体がよく見えているところにある。
- 日本の選手は一般にモーションが大きい。身体全体を大きく使いすぎる。それにリスト

(手首) が固いようだ。

- 日本チームは良いシステム・プレイを持っではいるが、システムに拘わりすぎている憾みがあった。特にリードされている時に、いたずらにボールキープをして時間を無駄にしていたが、もっと積極的にシュートをして追いつめるべきである。
- 感心したことは、身長は我々とそれほど変わらないのに、跳躍力がすばらしく、フォロー（リバウンド）が強いことだが、タイミングがうまくなかった。リバウンドは跳躍力だけではとれない。
- 日本の選手は非常に良い素質を持っているが、戦争中大幅に進歩したアメリカのバスケットから遠ざかっていたため遅れをとった。我々は日本の選手と同じ体質、同じ身体でアメリカの選手と試合をして、このようなバスケットボールを身につけたのである。我々のもたらした粗末な技術から何らかのものを汲み取って、若い人達を指導されたら、日本のバスケットボールの前途は洋々たるものであろう。
- 我々は試合を見にきたファンの多いのにも驚かされた。このような大観衆の前で試合をしたことは初めてである。日本のバスケットボール界はそれだけでも立派なものと言えよう。

以 上